

## 八十八夜、お茶の香りに誘われて

校長 松本 雅史

令和8年度も早くも1ヶ月が経とうとしています。5月はゴールデンウィークにはじまり、なにかとイベントが多い月です。気付けばツツジが早くも満開です。30年も前になりますが、埼玉県狭山市に住んでいた時期があります。狭山茶の産地でもあり、ちょうど5月の始めから茶摘みが始まります。お茶を蒸すときに出るいい香りがまちに漂っていたのが懐かしいです。

この狭山の北入曽という町に吉野弘さん（1926年-2014年）という詩人がいらっしやいました。近所の中学校の校歌も作詞されています。今月は、この方の詩をご紹介しますと思います。

### 『祝婚歌』（しゅくこんか） 吉野弘

二人が睦まじくいるためには 愚かであるほうがいい  
立派過ぎないほうがいい  
立派過ぎることは 長持ちしないことだと 気づいているほうがいい  
完璧をめざさないほうがいい 完璧なんて不自然なことだと うそぶいているほうがいい  
  
二人のうちどちらかが ふざけているほうがいい ずっこけているほうがいい  
互いに非難することがあっても 非難できる資格が自分にあったかどうか  
あとで疑わしくなるほうがいい  
  
正しいことを言うときは 少しひかえめにするほうがいい  
正しいことを言うときは 相手を傷つけやすいものだと 気づいているほうがいい  
  
立派でありたいとか 正しくありたいとかいう 無理な緊張には色目を使わず  
ゆったりゆたかに 光を浴びているほうがいい  
  
健康で風に吹かれながら 生きていることのなつかしさに  
ふと胸が熱くなる そんな日があってもいい  
そしてなぜ胸が熱くなるのか  
黙っていてもふたりには わかるのであってほしい

この詩は、氏が姪の結婚式に出席できないため、姪夫婦に書き送ったものだそうです。

「祝婚歌はぼくの民謡みたいなものだから、この詩に限ってコピーや使用料等、何のご心配なく」と話されています。

どうしてでしょうか、この詩を読むたびに、私はなぜか胸がいっぱいになってきます。大事な人の顔や場面がたくさん思い浮かんでくるのです。そして「ごめんなさい」と呟いたりします。

皐月は、田植えが始まる時期です。萌え出る生命の息吹をたっぷり感じながら、人と人のあたたかいつながりを広げ、深める月にしていきたいですね。